

金沢21世紀美術館 アートアベニュー 現代美術ア

ニスト 東京一極集中 文化首都 はんなり 異界

の文化 祭礼の文化 デイズニールランド 天神祭 船

瀧御 神賑 御鳳輦 明治天皇

神前結婚 神道 ゆかしい 歴史遺産 五座 六寺

法善寺 ティーブ・ジョブズ 情報端末機 茶の

湯 千利休 新松門左衛門 小林三 松下幸

之助 私立 博物館 デジタルコンテンツ

ツ 梅田北 知的交

拠点 やつて

似伝統 ツ

東京一極集中によって関西の活力低下が懸念される今、関西がもつ文化力を向上し、戦略的に発信する新たなアクションが求められている。折しも平成23年度より、「文化首都年・はなやか関西」もスタートする。第2分科会では、こうした状況のなか文化こそが経済や社会を活性化する鍵であることを確認し、具体的な方策を討議した。

関西の文化力向上と 戦略的発信



李 御寧氏
(大韓民国初代文化大臣)



千田 稔氏
(国際日本文化研究センター名誉教授、奈良県立図書館情報館館長、帝塚山大学特別客員教授)



高島幸次氏
(大阪大学招聘教授、大阪天満宮文化研究所研究員)



鳥井信吾氏
(関西経済同友会 常任幹事、歴史・文化委員会委員長、サントリーホールディングス代表取締役副社長)



蓑 豊氏
(兵庫県立美術館 館長)



コーディネーター
堀井良殷氏
(大阪21世紀協会 理事長)



文化の旗振り役

堀井 第2分科会では、関西の文化力の向上と戦略的発信のために我々は何を考え、どのようなアクションを起すべきかについてお話させていただきます。養さんはサザビーズの副会長やシカゴ美術館の部長などを歴任され、外国の文化事情についても詳しいと思いますが、そのご経験も含め、昨今の日本あるいは関西における文化への取り組み方についてのお考えをお聞かせください。

養 アメリカのインディアナポリスに、コロンバスという小さなまちがあります。そこにあるカミンズというディーゼルエンジン会社の社長が、自分たちのまちに優秀なエンジニアを集めようと、感性豊かなまちづくりを考えました。公共施設的设计料を同社が負担し、才能ある建築家たちの設計で学校や図書館、消防署、電話局などを建ててもらおうというものです。こうして個性ある建物がたくさん作られ、古いまちが近代建築の宝庫に一変しました。この活動は今でも続いており、コロンバスは観光地としても高い人気を得ています。また、私の仕事であ

る美術に関していえば、オランダの美術館館長の言葉がとても印象に残っています。それは、「親に美術館に連れて行ってもらった経験のある人は、必ず自分の子どもを美術館に連れてくる。しかし、そうでない人は必ずといっていいほど自分の子どもを美術館には連れてこない」というものです。私が大阪市立美術館の館長をしていたときも同じことを感じ、まさにその言葉の通りだと思いました。だから金沢21世紀美術館の館長になるときは、「子どもと一緒に成長する美術館をつくりたい」と市長にもちかけました。日本では長と名のつく人が理解しないと文化施策も全然進みませんからね。そこで市長から「全面的に応援するから是非やってくれ」と励まされ、多くの人に美術館に来てもらえるようさまざまな仕掛けをつくりました。美術館のオープン(2004年)を知らせるために、現代美術アーティストのイチハラヒロコによるユニークなカウンタダウンバナーを市街地に立てたり、美術館への道をパブリックアートのある「アートアベニュー」にしたり、

さらには美術館所蔵の作品をペイントしたアートバスを仕立てたり、商店街の250店舗に「美術館をサポートします」というマークを掲示してもらうなど、町ぐるみで美術館のオープンを盛り立てました。一方、美術館では、子どもたちが触れて楽しめる作品や自由に遊べるスペースを設けたり、5,000万円をかけてバスをチャーターし、3か月間で4万人の小・中学生を美術館に招待するなど、子どもたちに美術館を体験させる機会を増やしました。また、金沢21世紀美術館ができたことで、年間150億から200億円もの経済効果があるといわれています。美術館がまちの活性化に大きな役割を果たしているんです。こうしたことは大阪でもやろうと思えば必ずできるはず。ただしそのためには、コロンバスや金沢市のように旗振り役が必要だと思います。

はなやか関西

堀井 養さんには各地の事例をご紹介いただきましたが、やればできるし、必ず成果も出るはずですね。さて、関西にはもともと素晴らしい文化資源がたくさんあり、それらをつないで生かしていくべきで、まだまだすばらしい可能性が眠っていると思います。これについて千田さんのお考えをお聞かせください。

千田 「関西はひとつ」というと、「関西はひとつずつ」ではないかと皮肉られそうですね。京都や大阪、神戸などは、それぞれ個性があって良いという考え方です。私はそれも理解できますが、東京一極集中に対抗するためには、やはりまとまるほうが力を出せるのではないかと思います。外国では、2つのまちが互いにしのぎを削ってひとつの国を盛り立てている例が多いのに対し、日本では東京と関西という2つの都が文化的に機能しておらず、それが今日の関西の元気のなさにつながっているのではないかと考えます。関西、そして日本の活性化のためには、東京に対して関西という文化的な対立軸が必要なんですね。これを称

Fire Station No. 4



養 豊氏



金沢21世紀美術館の
開館カウンタダウンボード



金沢21世紀美術館

して「文化首都」といいます。平成23年度から国土交通省近畿地方整備局が「文化首都年プロジェクト」をスタートさせ、関西発信のさまざまなイベントを行います。東京は政治的な首都ですが、関西は日本を代表する文化的な首都であることを全国そして世界へ発信しようという事業です。また、私が参画している関西経済連合会の関西ブランド力向上研究会では、「はなやか関西」というキーワードで、関西がいかにかまどまって力を出すかについて考えています。関西とりわけ畿内においては、古代に都がおかれ、政治・経済の中心地として雅びやかな文

ているのでしょうか。経済界でこんな考えがまかり通るなら、大阪はますます文化砂漠になるでしょう。先ほど蓑さんが素晴らしい美術館のお話をされましたが、こんな状態では実現するのは相当先になると思います。

神賑行事

堀井 おっしゃる通りで、この文化力会議もそうした危機感から始まったものです。さて大阪ですが、天神祭をはじめ上町台地には日本発祥以来のたくさんのお祭りがあります。その研究の第一人者である高島さんは、どのようにして大阪あるいは関西の魅力

の周辺には神事を祝う氏子たちの「神賑行事」があるという重層構造ですね。ここで大事なのは、神事と神賑行事は完全に役割分担されていることです。守るべき伝統や作法は神職が神事として守ってくれるからこそ、氏子は安心して、天神祭に来る人たちに喜んでもらおうと「船渡御」や「ギャル神輿」といった神賑行事ができる。天神祭が100万人も集めるお祭りとして続いているのは、こうした役割分担があるからだと思います。また、天神祭は古い歴史を感じさせますが、じつは全てが古いわけではありません。例えば神様の乗り物である御鳳輦(ごほうれん)を担ぐ人たちの講は、明治9年頃にできました。氏子たちが、明治天皇が御鳳輦に乗られているのを見て思いついたんですね。このように、伝統は変え続けることによって残されるんです。ところで本日ご参加の皆さんは、日本で最初に行われた神前結婚式はいつだったかご存知ですか。じつは明治33年で、大正天皇が最初です。それまでは仏式でした。ちなみにサントリーさんが創業されたのはいつですか？

鳥井 明治32年です。

高島 面白いことに、神前結婚とサントリーという会社は同時期に始まったんですね。ところがサントリーはそれまで日本になかった洋酒を世に出したので新しく思え、神前結婚は神道という伝統文化が背景にあるから、ずっと古くからあるように思える。「古式ゆかしく」という言葉がありますが、

高島幸次氏



化を発祥させましたし、さまざまな歴史的文化があります。その意味で、関西の過去・現在・未来を「はなやか」という言葉で表現したわけです。ちなみに別の会合で、これを「はんなり関西」にしたかどうかという意見がありました。「はんなり」は京都ローカルな言葉です。文化首都というのは、そんなローカルな活動ではありません。また、昨年(2010年)、あるシンポジウムで関西経済界を代表する方から、「私たちが金を儲けたら、そのお流れで文化をやればいい」という発言がありました。儲かるまで文化はちょっと待っておけということです。しかもこの発言に拍手まで起きました。一体何を考え

を発信すべきだとお考えでしょうか。高島 日本人が魅力や憧れを感じるものに、「異界の文化」や「祭礼の文化」があります。異界の文化とは、金沢21世紀美術館やディズニーランドのような日常生活を忘れさせるようなもので、祭礼の文化とは、天神祭のように過去から現在までずっとつながってきている伝統行事です。毎年7月25日、天神祭の船渡御では100艘の船が1万人を乗せて大川を行き交い、川岸や橋の上には100万人の人出で賑わいます。こうした天神祭を含め、私は、すべての祭にはそれを賑わわせる特有の構造があると考えます。祭の中心には神職が行う「神事」があり、そ

この「ゆかしい」には、「懐かしく感じられる」という意味があります。ここで私が言いたいのは、日本人にとっては、本当に古いだけではなく、「古く見えること」も魅力だということです。だから大阪や関西の魅力を発信するためには、伝統的に見せる仕掛けも必要だと思います。さらに、もうひとつの魅力である「異界の文化」とうまく役割分担できれば、それなりの効果が期待できるのではないかと思います。

プロデュース機能

堀井 先ほどは千田さんから「大阪の経済界は何を考えているんだ」というお話がありましたが、私は千田さんがお考えほど、感性のない経済人ばかりではないように思います。例えば関西経済同友会では、歴史・文化委員会というのをつくって活動されていますね。その委員長である鳥井さんは、大阪の活力向上に歴史と文化をどのように生かすべきだとお考えでしょうか。

鳥井 大阪には歴史遺産である神社仏閣がたくさんあり、それらを生かすことがまちの活性化には重要だと思います。ミナミで「トリイホール」という劇場を運営している鳥居学さんは、「ミナミを復活させるには、お寺の復活が大事。神社仏閣があってこそ人が集まり、文化が生まれる」とおっしゃっています。私もそれには同感です。かつてミナミには五座(戎座、中座、南座、朝日座、弁天座)と呼ばれる劇場があり、その周囲には六寺(法善寺、竹林寺、自安寺、大見寺、六坊、法祐寺)と呼



鳥井信吾氏

ばれる寺院がありました。今は松竹座と法善寺だけになってしまいましたが、その一部でも復活させることで、ミナミの再生につながっていくのではないかと考えています。ところで、近年の日本経済全体を見ると、液晶テレビやDVDプレーヤー、カーナビといった日本のお家芸ともいえるエレクトロニクス産業が、1997~98年をピークに世界シェアを落としています。その原因は世界不況や円高、少子高齢化などさまざまに言われておりますが、私は、そうしたハード技術を組み合わせる新たなものを生み出すデザイン力や構成力が弱まってきているからではないかと考えています。例えば、スティーブ・ジョブズ氏率いる米国アップル社のiPadやiPodという情報端末機が世界に衝撃を与えましたが、注目すべきはそのハードウェアではなく、操作性やコンテンツを生み出すデザイン力や構成力です。この分野において、アメリカにやられっぱなしという感じがします。かつて大阪・関西には、茶室や茶碗、庭、掛け軸といったハードを巧みに構成して「茶の湯」というソフトを構築した千利休がいましたし、日本のシェークスピアと呼ばれる近松門左衛門がいました。近年は、小林一三や松下幸之助のように、伝統的な芸術や芸能を理解し、文化創造に寄与せんとした先鋭的な起業家も多くいました。そうした文化力をもう一度大阪に復活させることができればと思います。そのためには、大阪の人々が「文化が切り札であり、最後の砦である」という思いをひとつにする必要があると考えます。そうしなければ文化力を向上する方向性はいつまでたってもバラバラなままでしょう。大阪には、関西経済連合会、大阪商工会議所、関西経済同友会という3つの大きな経済団体がありますが、同様に文化をプロデュース

する団体があってもいいのでは、と思います。ですから、このバラバラに見える大阪人のパワーと個性を合わせるプロデューサー役として、大阪21世紀協会の活躍に期待しています。

生きていることが文化

堀井 がんばらなくてははいけませんね。さて、李御寧さんは日本や韓国での文化力向上への取り組みについて、どのようにお考えでしょうか。

李 韓国の初代文化大臣に就任したとき、ロシアの記者から「文化省をつくった目的は何ですか」と質問されたことがありました。そこで私は、「9年後に文化省をなくすことです」と答えました。文化とは本来各々の家庭から自然発生的に生まれるもので、官僚が



李御寧氏

管理したり創造できるものではないと思っているからです。ある笑い話に、ロシア人がハンガリー人に向かって「あなたたちの国には海がないのに、海軍があるのはおかしい」といったら、ハンガリー人は「そういうロシアこそ、文化がないのに文化省があるじゃないか」と切り返したというのがあります。文化は政府主導で作るものではないということですね。そこで人々の関心を集めるためには、単に金をかけるのではなくアイデアが重要だと思います。私は文化大臣として、国の管理ではなく、たとえ小さくても個人所蔵の私立博物館を建てることを支援しました。その結果、1000か所のミュージアムが各地にできました。とはいえ、美術館にあるものだけが文化ではあ

りません。私たちの文化は、いま私たちがいる、まさにここにあるんです。一見無骨に見えるこのマイク、この椅子、このテーブル、そして私たちが着ている洋服やネクタイに文化があるんですね。日本には、床の間に美術品を飾る文化があります。つまり、私たちの生活そのものが文化だということです。日本には昔から緋(かすり)の藍色や、紅殻といった伝統的な色彩感覚があります。最近はその人によってまちまちな感じがしていますが、色彩感覚は子どもの頃から養われるもので、これこそが文化であり伝統だと思います。日本には歌舞伎や能といった素晴らしい伝統文化があります。清少納言や紫式部が作った素晴らしい物語があります。私はそうした日本文化に尊敬の念を感じています。現代文化はiPodなどの情報端末機なしには語れませんが、重要なのはそのインターフェイスやデザイン性ではなく、芸術・芸能や物語といったコンテンツ(情報内容)だと思っています。日本、韓国、中国には、素晴らしい文化コンテンツがあり余っています。そこで、例えば日本の優れたアニメと韓国のソフト開発力が合わさって、素晴らしいコンテンツを世界に発信していくようなことが必要だと思います。そうすることで、人々の心をわくわくさせるような文化が、アジアから世界へと発信されていくのです。こうした文化は、政治や経済が作り出すものではなく、私たちが生きていることそのものなんです。

大阪活性化の起爆剤

堀井 李御寧さんからデジタルコンテンツを大阪から発信することが大事だというお話がありましたが、今まさに梅田北ヤード(大阪駅北地区開発)では、そうした拠点が生産しようとしています。会場に財団法人都市工学情報センターの箕田幹理事長がおられますが、その「ナレッジキャピタル構想」について、少しご発言をいただきたいと思います。

箕田 ナレッジキャピタルとは「知



箕田 幹氏

的交流拠点」という意味でございまして、知的な交流を通して新しい技術や文化を誕生させようというものです。そのひとつに、デジタル技術とアートを融合させることで、新たなデジタルコンテンツを生み出そうという試みがあります。例えば以前、中之島の国立国際美術館で、液晶画面に絵を描いてそれを動かすという企画を行いました。私は、その新しいアート表現を見て、こうしたことが大阪における新たな文化力になっていくのだと感じました。一方、そうした文化力を生むアーティストやエンジニアの発掘も重要です。そこでデジタルコンテンツの世界的なコンクールを大阪・関西で開催し発信すれば、インパクトがあると思います。梅田北ヤードは2013年春にまちびらきをしますが、ここを盛り上げていくためには、行政や企業だけではなく、市民も一緒になってイベントや人材発掘をすることが大事だと思っています。

堀井 梅田北ヤードが大阪活性化の起爆剤になるというお話ですが、これに関して養さんはいかがお考えでしょうか。

養 経済が文化を支えるのではなく、文化が経済を支えるという考え方が大事ですね。文化が栄えて創造力が培われ、それが経済の発展につながるわけですから。これを忘れず、旗振り役が出れば北ヤードのまちづくりも必ず成功すると思います。

堀井 大阪を文化で元気にするのは、歴史的に見ても「民」の力だと思いま

す。例えばサントリーさんは、企業として独自の文化賞などを主宰され、民の力を後押しされています。

鳥井 サントリー創業者の鳥井信治郎は3つのことをよく言っておりました。1つめは何でも積極的にやれという意味での「やってみなはれ」。2つめは「人、もの、金は天下のもの」。すなわち、それらは天からの預かりものだから、いずれはどこかに返さなくてはならないということ。そして3つめは「陰徳積めば陽報あり」。善行をするときは見返りを期待してはならないというものです。これらはすべて母からの教えだそうですが、同時にそれは、大阪の人たちからの影響もあったと思います。信治郎の息子で2代目社長の佐治敬三は、父の意を受けてサントリー美術館やサントリーホールをつくり、「サントリー地域文化賞」や「サントリー学芸賞」を創設しました。こうした活動のバックボーンにあるのは、「儲けた金のおこぼれで文化をすればいい」などという考え方ではなく、信治郎が影響を受けた大阪人の文化に対する「深い尊敬の思い」からきているのだと思います。



サントリーホール(東京都港区)

カミ意識と細やかな日本文化

堀井 日本人のDNAに流れる精神とでもいえるのでしょうか、大阪人に限らず、日本人はもともと繊細な美的感覚を持っているはずで。そうした感性がものづくりにも生かされるべきだし、文化首都を進めていく上で重要になってくると思います。

千田 日本文化の根底には、非常に細やかで微妙な心情があります。それは漢字で書く「神」ではなく、何か説明のつかない「カミ意識」が日本人の心に



千田 稔氏

あるからだと思います。例えば人を励ますときに、「ご活躍をお祈りします」と言いますね。この「祈る」というのは天満宮のような神社に祈るわけではありません。相手の気持を慮って「カミ的」なものに願いをかけているわけです。こうした日本人特有の倫理観や細やかな心遣いで物事を行えば、素晴らしい日本文化が創造されると思います。しかし、そうした心遣いもアメリカの合理主義が入ってきてから断ち切られたように感じます。例えば最近感じることに、講演者が勝手に水を飲むよう講演台にペットボトルがそのまま置いてあることがあります。確かに合理的ではありますが、日本人ならせめて蓋を空けておくとか、コップを添えるといった細やかな心遣いがほしい。また、梅田北ヤードのお話がありましたが、技術と芸術が一体になるというのは何も目新しいことではありません。表現手法がデジタル化されただけなのです。デジタルというのは情報処理の技術ですから、これだけで文化をつくるものではありません。だから新たな文化を発信するには、日本人が本来持っている細やかな思いを表現することが大切でしょう。また、李御寧さんがおっしゃったように、文化とは生きることです。京都では、オムロンや京セラ、島津製作所などの素晴らしい技術文化が生まれています。これは京都人特有の生きていく文化、つまり細やかな心遣いの文化があったからではないでしょうか。それがしっかりしていれば、東京

に本社を移さずとも堂々と地元で生きていける。また、大阪がよくなれば関西がよくなるという発想は、東京一極集中の大阪版でしかありません。東京が良くなっても地方が良くならないのと同じ。大阪だけが突出しても、和歌山や徳島が良くはならないんです。

教育と文化

堀井 その通りです。ですから大阪だけではなく、関西を視野に文化首都運動を積極的に推進すべきだと考えます。さて、高島さんはこれまでの話を聞かれてどのように思われますか。

高島 梅田北ヤードでデジタルコンテツのコンクールを行うというお話については、私が申しました伝統的に見せる仕掛けと関連しています。例えば江戸時代の大阪には、木村兼葎堂という優れた大学者がいました。そこで「木村兼葎堂賞」というのを設立すれば、いかにも歴史と伝統のある大阪特有の文化賞というイメージが訴求できますね。いわば疑似伝統です。また、「文化とは政治や経済の後についてくるもの」という考え方については、私は、日本人はそういうマインドコントロールを受けてきたのだと思います。学校で習う歴史の教科書がそれです。例えば室町時代だと、鎌倉幕府が倒れて室町幕府ができたという政治の動きが書いてあって、その次に農業や商業などの経済の動き、そして最後に当時の文化について触れてある。こんな教育を何年も受けていると、誰でも「文化は政治や経済の変化に対応してくっついていくもの」と思ってしまうでしょう。文化を論ずるには、まずはこうした問題も考える必要があると思います。ところで昨今は、若者のコミュニケーション能力の低下を危惧する声が多く聞かれます。「コミュニケーション～」と名のつく学部や学科をおく大学が多いのもそれを反映してのことでしょう。そんな多くの若者に文化は政治や経済の付け足しであるような教育をしてしまったら、いくら私たちが関西の文化力向上について論じても空しいものになります

ね。そこで私は、私たちも含めて若い人たちのコミュニケーション能力を高めるひとつの方策として、祭を企画し実行することを提案します。地域の祭でもいいし、マンション入居者たちの祭でもいい。祭は、さまざまな人とさまざまなコミュニケーションをとらなければ催行できません。鳥井さんが、「最近の日本人は構成力・デザイン力に欠ける」と話されましたが、自分たちで祭を組み立てることで、構成力・デザイン力が高まると思います。

オブジェクティブな思考

堀井 若者にどのようなメッセージを送り、支援していくかは重要なテーマですね。

千田 最近では仏像ブームだとかで、奈良に多くの若い人が訪れます。神社詣でをする人も多いと聞きます。そうした心の癒しを求める人の受け皿としては、大阪は奈良の文化力にはかなわないでしょう。昨今の少子化の影響で、大学は学生を確保するためにキャンパス整備に躍起ですが、奈良では、東大寺や薬師寺などの歴史遺産を含めて、奈良を丸ごとキャンパスにしようという構想があります。こうしたことは若い人の心を打つメッセージになるでしょう。

養 今の日本の若い人たちには、もっと外国に出て行って勉強してほしいと思いますね。日本だけでは物事をサブジェクティブ(主観的)に考えてしまいがちになりますから。学生時代には、オブジェクティブ(客観的)な思考を養い、学問の面白さを見つけてほしいと思います。

高島 おっしゃるように学問の面白さを知るとはとても大事なのですが、いくら「学問は面白いものだ」といっても、学生には伝わりにくい。であればいっそのこと、「海外で遊んで来い」ぐらい言っても良いだろうと思います。

堀井 本日司会の八木さんは、韓国に90回も行かれたそうですね。そうした海外経験から、若い人に向けてメッセージをお願いします。

八木 私は高校時代に留学を経験しましたが、外国でさまざまな価値観の違いを体験することで人間はかなり強くなれると思います。とはいえ、現在日本人の海外留学生は10年前に比べて4割減だそうです。韓国に90回行ったというのはほとんどが仕事なんです。それでソウル市観光大賞という賞をいただきました。そのトロフィーというのが、棒状のクリスタルの中にソウル市に流れる漢江(はんが)の水と土を入れただけのシンプルなものでした。賞品としていただいた化粧品は韓紙で包まれており、私はそうしたものに韓国の誇りを感じました。李先生が「文化は日常のなかにある」とおっしゃったことは、こういうことなんだと思います。日常にあるものを贈るだけでも、貰った人は強く印象に残りますね。また、若者にとっては賞が励みになりますので、北ヤードのアワードは良いアイデアだと思います。



八木早希氏(総合司会/毎日放送アナウンサー)

ほうきの柄を切るな

堀井 鳥井さんは、ウイスキーのマスターブレンダーとして日々ご研究されるなかで、「学び」についてはどのように感じておられますか。

鳥井 サントリーがウイスキー作りを始めて88年になります。これだけ長いことやっていけば、ウイスキーのことは知り尽くしているだろうと思われそうですが、そんなことは全くありません。つい最近も新たな大発見をしました。ですから温故知新とは良く言ったもので、若い人には、古いことのなかに知るべきことがいっぱいあるということを伝えたいですね。

堀井 韓国の学生は日本と比べていかがでしょうか。

李 お手本になることは少ないですね。悪い習慣は韓国にも日本にもあるし、良い習慣はどちらも少ない。若者の変化を年配の先生がよく分かっていることも共通しています。最近若者の間でツイッターやフェイスブックが人気ですが、そのような「雑談」を通していろんな情報や生きる楽しさを得ることは、昔からある文化です。ある寓話に、大阪の商店主が丁稚に玄関掃除を言いつけたところ、隣の店の丁稚と雑談ばかりしているのに腹を立て、ほうきの柄を短く切ってしまったというのがあります。柄が短いと上を見て雑談する余裕がなくなりますからね。しかし、こうした功利主義は文化の自然発生を阻害します。無駄口や雑談であっても、それでさまざまな情報がやりとりされ、新たなアイデア

が生まれるきっかけにもなるからです。だからほうきの柄を切ってはだめ。下ばかり見ているのは希望が生まれません。

堀井 関西の文化力向上と戦略的発信に向け、皆さんからさまざまなアイデアやヒントをいただきました。今後の取り組みにぜひ生かしていきたいと思います。本日はありがとうございました。



堀井良殷氏

李 御寧 (イオリョン/大韓民国初代文化大臣)

※プロフィールはp10に掲載

千田 稔 (せんだみのる/国際日本文化研究センター名誉教授、奈良県立図書情報館館長、帝塚山大学特別客員教授)

1942年奈良県生まれ。1968年京都大学大学院文学研究科修士課程地理学専攻、1975年追手門大学助教授、1989年奈良女子大学文学部教授、1995年国際日本文化研究センター教授を経て2005年より現職。『日本の原点 こまやかな文明』(NTT出版)を近刊予定。

高島幸次(たかしまこうじ/大阪大学招聘教授、大阪天満宮文化研究所 研究員)

専門は日本近世史。主著に天神信仰・天神祭を研究した『天満宮御神事御迎船人形図会』『天神祭一火と水の都市祭礼ー』など。「NPO上方落語支援の会」理事、「繁昌亭大賞」選考委員など兼務。

鳥井信吾(とりい しんご/関西経済同友会常任幹事、歴史・文化委員会委員長、サントリーホールディングス代表取締役副社長、公益財団法人サントリー芸術財団代表理事)

1953年生まれ。1975年甲南大学理学部、1979年南カリフォルニア大学大学院を卒業。伊藤忠商事を経て1983年サントリー入社。取締役、常務、専務を経て、2003年から副社長。2002年にウイスキーのマスターブレンダーに就任。

養 豊(みの ゆたか/兵庫県立美術館 館長)

1941年金沢生まれ。1977年米国ハーバード大学文学博士号取得、1988年シカゴ美術館東洋部長、1996年大阪市立美術館館長、2004年金沢21世紀美術館館長、2005年金沢市助役、2007年サザビーズ北米本社副会長、大阪市立美術館名誉館長、金沢21世紀美術館特任館長を経て、2010年より現職。

堀井良殷(ほりい よしたね/大阪21世紀協会理事長)

1936年生まれ。1958年東京大学卒業、NHK入局。ニューヨーク特派員、大阪放送局長、東京本部NHK理事を経て1999年より現職。著書『なにわ大阪興亡記~だから元気を出さない~』ほか。大阪文化祭賞選考委員会会長、(社)関西経済同友会「水都・大阪」推進委員会共同委員長など兼務。